

# 幾山河

## 第11号

平成10年6月1日  
発行  
社団法人 沼津牧水会

### 目次

ご挨拶 榎本 篁子	2
旅人さんの思い出 玉城 徹	4
旅人さんを偲ぶ 渡辺邦彦	7
牧水と千本松原 四方一瀾	9
開館10周年記念行事 牧水の愛した沼津	12
牧水歌碑めぐり	14
第44回 沼津牧水祭 短歌大会	16
碑前祭・芝酒盛	17
第10回 雛の歌会	18
文化講座	19
牧水旧居ミニチュア	20
特別寄稿「幾山河」	21
サロン音楽の夕べ	22
平成9年度事業報告	23
定款・後記	24



# ご挨拶

榎本 篁子  
えの もと むら こ



この度、沼津市若山牧水記念館館長を仰せつかりました榎本篁子でございます。前館長で私の父でもあります若山旅人は、平成十年三月十四日他界いたしました。生前賜りました御厚誼に心よりお礼を申し上げたく存じます。

三月十八日の葬儀の際には、沼津市長齋藤衛様から弔辞を賜りました。齋藤市長様には二年前の沼津牧水祭前祭の折、はじめてお目にかかっております。その二週間後の十一月十日、「多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれにもおもふ人のあれかし」の歌碑のある世田谷区玉川の兵庫島で、東京牧水会の集いが催されましたが、その折、柴田事務局長様が大変嬉しそうに興奮しておられました。伺いますと、ちょうどその日が市長選の投票日で齋藤様が新市長になられることが確実だというお話でした。

思えば、父が館長として出席した最後の沼津牧水祭で、奇しくも齋藤市長様との接点を持たせて頂いたわけでございます。

お心のこもったお詞を伺いながら、齋藤市長様と父とは一度だけの出会いでしたが、御縁というものを改めて思ったことでございます。

牧水と沼津との縁は大正五年から始まり、数えると八十二年になります。最初は一人の過客に過ぎなかったが、千本松原に魅せられて永住を決意した沼津は、終焉の地となりました。

父旅人も、小学校の二年から沼津中学までを牧水と共に沼津で過ごし、社会へ出てからも菩提寺である乗蓮寺とのお付き合いなど、沼津との縁は脈々と続いておりました。そして、最後は、牧水の書齋を模したコーナーもある記念館の館長として、ふるさと沼津へ戻ってまいったのでございます。

ただ、父は自らのふるさととしての懐かしさを申すよりも先ず、没後七十年にもわたって牧水を大切に育ん

でくださった沼津市に、また記念館を運営してくださる沼津牧水会の皆様にお礼を申し上げなければと、それのみを念じて晩年を過ごしておりました。

昨年九月三十日、記念館の開館十周年記念として牧水旧居のミニチュアハウスが完成し、その御披露の席で、「亡父なればか吾にも見えて現つなれなつかしく寄りて部屋のぞく眼の」

とお礼の歌を差し上げたことで、牧水の息子としての自身の役目を果し終えて、安堵した様子でございました。この時が最後の外出となりましたことを思いますと、これもまた不思議な力を感じずにはいられません。

その父の後を私にというお話を突然頂きまして、私がお役に相応しいかどうかということなど、考える以前のことで、どうお答えしてよいか分からないほど逡巡いたしましたというのが本当のところでございます。

迷いに迷っておりました時、

「ひとすぢの光のごとく母が子に祖父が孫へと伝へゆくもの」

という歌を父のノートに見付けました。

二年前の牧水生誕一一年を記念して夫尚美なおよしが著した「牧水歌碑インデックス」に対して、

「逢はせたかりし牧水なるに世に在らず婿ぎみの君あともとめゆく」

の歌を詠んでくれたのですが、そのとき「篋子の中には牧水がいるわけだから、逢っていることになるのかもしれないね。これからも尚美君と二人で牧水の心というものを大事に育てて行ってほしい」と言われたことを思い出しました。

牧水のことばに「われらみずからの小さき智恵にたよるな。おのれを空しうしてただ神の前に立て」とあります。

また、林理事長様も「気負わず自然体でなさってください」と仰ってくださいました。記念館館長などという大仰な肩書きではなく、結婚前の本籍が牧水の旧居「沼津市本西松下」であったことから、私のふるさとでもある沼津の皆様とお親しくさせていただけたらということ、お引き受けした次第でございます。

どのような形でお役に立てるのか分かりませんが、林理事長様はじめ皆様のお援けを得て、父の心にも沿いながら、役目を果たしていきたいと存じております。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

# 旅人さんの思い出

玉城 徹



若山旅人前館長と榎本薫子現館長（平成8年6月2日 記念館会議室）

一昨年（一九九六年）十月のことである。多分、牧水碑前祭の翌日であつたかと思う。沼津駅に近い「モレシヤン」という喫茶店に、わたしが入り込んでゆくと、そこに旅人さんの顔があつた。

——昨日、帰るはずだったが、くたびれてしまったので、もう一晩泊まった。

というのであつた。

それから、あれやこれやと若い頃の思い出を語られた。わたしは、ただ黙って拝聴した。

牧水のことではない。

中学校の先生の勧めで建築を学んだことが中心で、その先生を懐かしく思い出す心もちが、その口調に滲み出た。

それが、面白かつた。

父、牧水について語ることは、旅人さんにとって、半ば義務だから、どうしても、ある型ができてしまうのを、免れないだろう。何べんも話すうちに、初めのかげやきを失った部分も多いだろう。旅人さんが、今こうして、牧水を離れて、もつぱら、自分のことを語るのには、善いことだと、わたしには思われた。牧水について何かを、旅人さんに聞きたいとは思わなかつた。

——若山、おまえんとは、貧乏だから。

という、中学の先生の言葉も、話の中に出てきた。

牧水没後の若山家の苦境も想像されて、その言葉は、わたしの胸に沁みた。

——建築家として、相当の腕が、自分ではあるつもりです。

と、旅人さんは、ちよつと胸を反らすようにして言ったりもした。そういう子供らしいところがこの人にはある。

その心もちは、わたしにも、よく了解できるが、それなら、もっと親不孝になって、自分の仕事に徹すべきだった。親孝行は善いことではないという感想が、ちらと、わたしの心に浮かんだ。むろん、それは酷な批判だから、口に出したりはしない。

『大正世代の歌』（短歌新聞社・一九九二）という旧著の中で、わたしは、旅人さんの『白い霧』という歌集を紹介しながら、次のように述べたことがある。

いったい親が偉い歌人であった場合、その息子として歌を作ったゆくとすることは、はなはだ辛い立場ではないかと、わたしは想像する。殊に両親ともに強烈な存在であり、しかも、古い歴史をもつ「創作」という結社を継承し、親の代からの門弟を率いてゆかねばならぬ苦労は、なみなみのものであるまい。わたしは、しばしば、若山旅人に対して、同情に堪えないような気もちになることがある。

これが、旅人さんの運命であつたらう。

「創作」の内部が、少しごたごたした時、その頃、日野市の公団住宅に住むわたしのところへ、旅人さんが相談に来られたことが一度あつ

た。結論として、わたしが答えたのは、「強気で進むべし。」という意味のことだったと記憶する。わたしは、何も、個人としての旅人さんに味方をしたのではない。

牧水の雑誌である「創作」は、やはり、旅人さん一人が中心になって統率してゆくべきである。頭が幾つもあったのでは仕方がないと思つたのである。合議制などということは、意味がない。牧水の旗は、あくまで旅人さんが掲げなければいけない。これが、わたしの思想であつた。

これは、秘すべき話であるから、これまで、発表しなかつたが、旅人さん亡き今となつては、記録しておくべきことだろう。その頃、旅人さんについては、さまざまの誹謗が流れ、その一部は、わたしの耳にも届いた。そんなことは、まあ、仕方のないことだ。

歌集『白い霧』から、わたしが前掲書に抄出したのは、次の十首である。それを、ここに再録する。

流れ来て川面を迷ふ人形のひとまはりして見するさびしさ  
心決め押す店の扉は真鍮の把手冷えたり秋日照るなか  
土手に来て電車見おろすたのしさをこの歳にして疑はずをり  
夜に入らば溪の瀬音ものぼり来む夕日射し照る峽の茶畑  
見送れば改札口をぬけゆきて振り返る目の老いましにけり  
窓下に犬の鎖がときに鳴る今宵の月は庭にくまなし  
寝台車に目覚めて聞けばいまの駅を乗り来し女ら出雲訛す  
暮れなづむ谷もどり来てわが宿の灯りの見ゆる木立に入りぬ  
線路より低きホテルの部屋に入り鳴りすぐる貨車の腹仰ぎをり

師崎の古き遊里の窓格子部屋より洩るるひとの声あり

今、読み返してみても、それぞれに面白い歌だと思われる。自然体でありながら、その中に特異な感覚の手ごたえがある。

けつきよくのところで、牧水系で戦後一ばん良い作者は、旅人さんだったかという心もちがされる。何だか不思議のようであるが、それが、当然でもあろう。それだけ、旅人さんに、苦しみが多かったのである。

旅人さんの短歌は、晩学である。

わたしが、喜志子夫人に呼ばれて立川富士見町のお宅に参上したのは、一九六七年七月のことであった。そのことは、山村泰彦さんの「朝霧」という雑誌に、一昨年、載せて貰ったから、ここに繰返さないが、旅人さんからわざわざ電話があつて、その文章に対する礼を述べられたのには、恐縮したのであつた。

一九六七年、わたしは四十三歳、喜志子夫人逝去の前年である。その日、接待役をされた旅人夫人いく子さんの話では、「この頃、旅人が歌を作り始めた。」ということであつた。この報告は、喜志子夫人にむかつて為されたのである。わたしはまだ、旅人さんと面識がなかった。そんなわけで、牧水亡き後喜志子夫人が守り育ててきた「創作」を、旅人さんが継ぐのは、もつとも自然で賢明な選択だつたと思われる。

感傷から言うのではない。現実の問題である。

感情論はいろいろあつた。晩学の旅人さんの作歌力を危ぶんだり、時としては、馬鹿にかかるといふような声もあつた。厭なことがある。旅人さんが、それに対して、鎧のような姿勢をとつたのは、やむを得ないことであつた。いつだつたか忘れたが、「創作」に出た旅人さんの

歌に対して、ここはこうした方がよろしかろうと、葉書で寸評したことがあつた。旅人さんは大へん喜んで、そういう忠告を受ける機会の乏しいことを言つてこられ、その素直さに、わたしは、心を打たれた。あれこれと、とりあつめて、旅人さんのことを、わたしは語つてみた。大方は、わたし一人のひそかな思い出に過ぎないが、この際、やはり、記録として語つておく方がよいかと思つたのである。

玉城 徹（たまき とおる）

「うた」主宰、毎日歌壇選者  
沼津市下香貫樋ノ口一七〇四



筆者近影（平成10年4月21日 記念館ラウンジにて）

# 旅人さんを偲ぶ

前宮崎県東郷町教育長

渡邊 邦彦



宮崎県東郷町 憩いの峠にて (平成9年1月31日)

昨年十一月一日、私は沼津市若山牧水記念館開館十周年記念行事に参加した。行事終了後、榎本尚美さんに伴われて沼津を発ち相模原のマンションに旅人さん（旅人先生と敬うべきだが親しみを込めて旅人さんと言わせて

いただく）を訪ねた。旅人さんは私の到着を待っておられたようで大変に喜ばれた。二月初め日向市駅で別れて以来九か月ぶりの再会である。積もる話もいっぱいあったが、夜も更けておりお疲れの様子だったので長時間

の談話はできない。私達は固い握手をして別れを惜しんだ。

そして今年の一月一日、昼食をとっていると旅人さんからの電話だ。「今、いい気分です。新年を祝っているよ。元気になったらもう一度日向に行くからその時はよろしく」と意外にお元気な声で私は嬉しかった。しかし、結局これが旅人さんとの最後の会話となったのである。

旅人さんには十数年間ご交誼をいただいたが、いろんな思い出が浮かんでくる。平成五年十月十七日、第四十回沼津牧水祭に参加した時のことである。前日沼津に着きホテルは「菊屋」が予約してあった。旅人さんも一緒だった。その夜はこのホテルで懇親会が開かれ、沼津牧水会の理事の皆さん方が出席された。宴は大いに盛り上がり旅人さんもご満悦の様子だった。

さて翌朝、七時半頃だったと思う。部屋の中の電話のベルが鳴った。旅人さんからだ。「僕の

部屋に來い」という命令。急いで顔を洗い部屋に入ると、机上に原稿用紙を並べてお仕事である。新聞社の歌壇の選評の執筆中で今朝六時頃からやっているとのこと。傍にはビール壺が一本置いてある。旅人さんの顔はほんのりといい色をしている。「飲みたくなつてね、下へ行けば昨夜の残りがあるはずと思つてね、宿の者に知れぬようにこっそり行つて持つて来たよ、あなたもどうぞ」と残り少ないビールを私も湯飲み茶碗でいただいた。牧水の一首、「足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺は立ちて待ちを~~ぬ~~<sup>る</sup>」を思い出し私はおかしかった。

さて、夜来の雨も碑前祭の開始前には止み、旅人さんが歌碑に献酒をなさる時は陽が射していた。芝酒盛でご機嫌うるわしく、うまそうにビールを飲んでおられるご老公、私は今朝の一件を思い出し、またおかしくなった。

時は移り、それから二年後の平成七年九月十七日、牧水生誕の地東郷町では生誕百周年の記念行事を開催し、旅人さんも来町された。東郷町坪谷には若山家の墓地があり、健海ご夫妻、立蔵ご夫妻が葬られており、昭和三年の秋(十一月中旬と推察される)、沼津から帰つて来た牧水の分骨が母マキに抱かれて

眠っている。

この日の朝、行事が始まる前、旅人さんは墓参りをされた。沼津からご来訪の五月女教育長さん、林理事長さん等を同行された。墓前にはすでに酒の入ったコップが供えてあった。ちょうどその頃、尾鈴山の峯から顔を出した太陽にコップの酒は光っていた。礼拝を終えた旅人さんは、「おお、黄金の酒だ。美しい」と言つてそのコップを持ち上げたかと思うと口に含まれた。「うーん、うまい」、周囲の者は苦笑した。そして、そのコップを私に差し向け、「飲んでごらん」とおっしゃる。私は素直に付き合つた。「黄金の酒」——この表現に、さすが——と私は感服した。思い出し尽きない。その一つひとつがなつかしい。旅人さんは物事を処理するに当たつて、「いかげんに」ということが大嫌いだつた。したがつて安易な妥協を許さなかつた。これはもちろん性格であろうが、建築設計家という職業から来ているものかもしれない。そういう強さの反面、非常に心の優しい人でもあつた。常に細やかな気配りをなさる人であつた。宮崎にも幾度かお出でいただいたが、そのたびに旅人さんのファンは増えていた。白髪に紺のベレー帽がよく似合う老紳士。宮崎ではまさにスター的存在であつた。

旅人さんは、時々咳くように「二世は辛いよ」と言つておられた。その心情は私にも判るような気がした。しかし、旅人さんは牧水の長子としての重責を見事に果たされた(無礼極まる言い方だが)と思う。そして、最近「もう、私も疲れたよ」と言つておられた。



若山旅人氏宅にて(平成9年11月1日夜)



# 牧水と千本松原

国士館大学教授

## 四方一瀨

……明日にも来ていただきたい心地です。ほんとに近々おいで下さいませんか、二、三日お泊まりがけのおつもりで、何もありませんが、庭さきの松林だけはゆつくり見ていただきたいものとおもいますので……

東京に住む関野直七郎に牧水はこう書き送った。来てほしい、見てもらいたい、子どもが無性に訴え、おねだりするような、いかにも牧水の人柄を彷彿とさせる手紙である。牧水は沼津移住の動機を、

初めわたしが東京から移住するにこの沼津を選んだのは、その少し前、伊豆の土肥に行かうとして沼津に一泊し、端なくこの松原を見出してその偉大さに驚いたのがもとであった。（「沼津千本松原」）

沼津という土地はいろいろな分野に優れた人材を生み出し、多くの多様な人材が沼津を訪れ沼津に住まった。しかし沼津に生まれた人材も沼津を訪れた人々もやがて沼津を去っていった。沼津に住み人生の終焉を沼津で迎えたのは牧水だけといってよいであろう。その牧水に沼津への移住を決意させ、その地を永住の地とさだめ、人を誘って見せたくて見せたくてならなかったのは千本松原であった。牧水はそこに囀る小鳥の声に目を覚まし、

そこに四季おりおりに咲き、実をつける草や樹木に時を忘れて彷徨い、また月の夜は手ぬぐいで頬かぶりをし、貧乏徳利を片手に月に浮かれ、興のおもむくままに根の上がつた松に寄りかかって朗詠し、わが庭とした。

牧水は、めじろ・百舌・ムクドリ・ひよみそざざい・あおじ・あとり・ウグイス・四十雀・あかじ・まつめ・ひは・ひよどり・ツグミ・ほぼじろ・山雀・きつつき・フクロウをこの松林での友とし、大ゆづり葉・たぶの木・ネズミモチ・とべらの木・榎・竹なぎ・撫子・梅・あおき・棕・木苺・せんだん・アケビ・野イチジク・もち・椿・ぐみ・たら・篠・いたどり・まんりよう・藪柑子・シダなど四季それぞれに花や新緑を愛で、また秋や冬、葉の落ちた林の赤い実をなつかしみ、これらの小鳥や草花や灌木ひとつひとつについての植性や特性に心掛けていた。ある植物学者の調査によれば千本松原には二〇〇種類の植物があるということも学んでいたが、牧水





の関心はもちろん植物学や鳥の知識ではなく、愛しいものを限りなく知りたいという愛情にあったことはいうまでもない。

千本松原は小鳥たちや草花を育み、慈しんでくれた。そして千本松原は人に安らぎを与え、人の内なるものに美と深遠なる心情を育ててくれた。

であればこそ、牧水にとつて千本松原の伐採は許しがたいものであった。

大正十五年、宮内庁から帝室御料林一四町四反を一萬六〇九一円で払下げをうけ、そのうち沼津市にもっとも近いお首さん辺りの五

町一反の松林を沼津市が希望するなら二〇万円以上で払下げてもよいとの噂がたった。この辺りは牧水が愛した千本松原のなかでももっとも松林として愛し、かつ沼津のもっとも誇りうる松林であった。

およそ政治や世間の雑事には無関心の牧水もこの噂を聞いて黙ってはいられた。早速八月十四日付で沼津日日新聞に、つづいて九月六日には東京時事新報とともに「沼津千本松原」と題する一文を発表した。

牧水は千本松原の素晴らしさ、偉大さをただ主観的に、感情的に述べたのではない。彼

は日本の全国各地を行脚し、そこで見た日本の代表的な松原と比較してそれを述べているのである。白砂青松の代名詞ともされる須磨明石については全然問題ではない、小さい箱庭で、松は奇麗すぎると批判し、筑前千代の松原はみっちり茂っているがみな小松で、病気で枯死の危険があると観察している。薩摩西海岸の松原は防風林という実用のもので自然さに欠ける。三保の松原や羽後酒田の松原は白砂青松で深みがなく、下総君が浜の松原は松は大きく繁っているが松ばかりで規模も大きくないと論評している。

それに対して千本松原の勝れている点は樹木が大きく老木が揃っていること、その松がいわゆる磯馴松の曲がりくねったものでなく、亭々として聳え轟々として直立している。しかも松原そのものが広大であると記している。私もこの松林の多くを見たが同感である。そしてさらに次のように記している。

今一つ、他の凡百の松原に比しわが千本松原のすぐれている一事はこの松原が単なる松樹の竝立にあらずしてその下草に無数の雑木を茂らしてゐる事である。ことにそれは沼津寄りの、首塚から西、甲州街道を境にした北側に著しい。雑木の種類は諸君の知悉せらるる所であらう。

タブ（玉樟）の木、楡其他思ひがけぬ木  
まではえてゐる。ある所に入り込んでゆ  
けば其處はもう「松原」ではない、「森林」  
である。鬱蒼たる樹木の根には羊歯が密  
生してゐる。篠が茂つてゐる。そして更  
にその茂つた樹木の枝葉の蔭になりしだ  
れた果実に寄りつどふさまさまの小鳥の  
啼聲を諸君は知り給ふか。

牧水がもつとも「すぐれている」とした場  
所がどこであるかはお分かりであろう。

いたたまれなくなつた牧水は彼に似合わず  
「静岡県知事伊東氏に申す」の一文をものし  
た。この文の結末については明らかでないが、  
草稿が牧水記念館に所蔵されている。大悟法  
利雄氏の解説文によって一部を引用すると、

あなたは御存じか知らないがこの千本  
松原は松原として恐らく日本一のもので  
ありませう。ともすれば世界一のもので  
ありませう。松原そのものとしての長さ  
から幅から松の齡から幹の大きさからま  
たその松原の松に似ぬ轟々亭々として聳  
えてゐる事から。而して更にその下草に  
武蔵野あたり以上の複雑な密生した雑木  
林の深さ大きさを有する事から。然り而  
して背景に富士を負ふ事から。さうでな  
かつたら貴下の部下にでも調べさせて御

覧なさい。

というもので、県知事宛とは思われない厳し  
い論調である。

九月十一日、千本浜道の国技館で千本松原  
伐採反対の市民演説会が開かれることになつ  
たが、牧水は新聞記者から要請されるままに  
演壇に立つことになった。まったく不慣れた  
ことであつたがこの時ばかりは躊躇していら  
れなかつた。むしろ氣負つた気持ちで伐採反  
対を訴えたかつたのであろう。この日、千葉  
の榊原克重には「けふ夕方から国技館で市民  
大会が開かれ、小生も一席やぢられます」と  
認め、北海道の大田平には「沼津唯一の宝、  
千本松原を伐らうといふ乱暴な騒ぎが起つて  
をり、その反対運動を起してをるのです。そ  
のため、昨日今日明日と身体をしばられ：」  
と手紙を送つてゐるのである。

牧水がこよなく愛し、そして必死になつて  
守ろうとした千本松原はいまどうなつてい  
るのだろうか、そして今後この二の舞いが決  
まるといふ切れるのであろうか。

「牧水と千本松原」のかかわりを今のことと  
して考えていかなければならないと思うので  
ある。

四方一瀧（よも かずみ）

(注)沼津牧水会理事

## 第二回若山牧水賞に佐佐木幸綱氏の『旅人』



若山牧水の生誕百周年を記念して  
宮崎県等により創設された「若山牧  
水賞」の第二回受賞作品は、早稲田  
大学教授で短歌結社「心の花」編集  
長佐佐木幸綱氏（五九歳）東京都世  
田谷区にの歌集『旅人』に決まった。  
『旅人』は、同氏が一九九二年から  
一年間、早稲田大学在外研究員とし  
て、家族と共にオランダで生活した  
間の作品をまとめたものである。

沼津市若山牧水記念館開館10周年記念

〈3部構成イベント〉

# 牧水の愛した沼津

平成9年11月1日(土) 午後1時～

千本プラザ・音楽ホール

若山牧水記念館開館10周年記念の行事が三部構成により開催された。

第一部は望月直美のピアノ独奏と与五沢誠のフルート演奏(ピアノ伴奏東郷美津子)で、共に気品のある演奏であった。また、沼田聡雄作曲の「幾山河」が諸星肇の独唱(ピアノ伴奏大久保敏之)により初演された。

第二部の鼎談は、この催しの主軸となる時宜を得た厚みのある有意義な内容のものであ

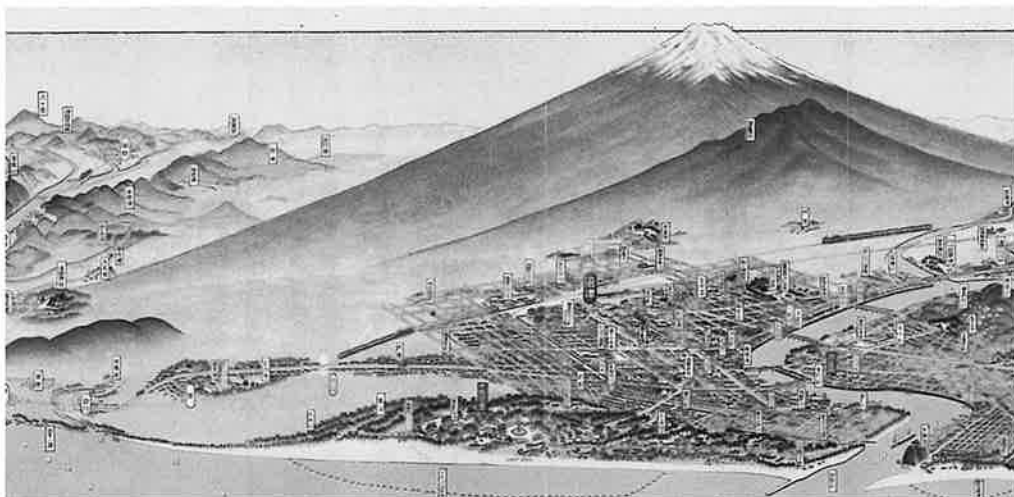


驚きの声があがった。この写真はNHKテレビの「クロースアップ現代」でも放映された貴重なものである。

第三部マンドリンと歌う会では、加藤マンドリン楽団の親しみ深い軽快な音色に合わせて、来会者一同、華やいだ心で、ナツメロ「緑の地平線」「影を歩いて」「丘を越えて」また「白鳥の歌」など合唱した。めずらしい「俗曲カッポレ」や沼

津地方の子守唄「この子の可愛さ」も披露された。

この催しのために編まれた小冊子「牧水と千本松原」には、牧水の短歌や随筆、中でも「千本松原伐採反対」のために



ぬま津地図（昭和3年） 沼津市若山牧水記念館蔵（大悟法利雄氏寄贈）



新聞に発表した随想が載っている。ほかにも前記の松葉の電子顕微鏡写真など貴重な紙面もあるが、興味深かったのは表紙の絵である。

それは昭和初年、牧水が沼津に住んでいた頃の沼津の街全景の俯瞰図で、南方向上空から沼津を経て、遙か富士山頂まで見事に描かれている。千本松原は、今よりずっと長く河口をさかのぼって植えられている。

沼津中学校、第二小学校、第四小学校などは一面に続く田の間に見えるし、牧水が最初に住んだ香貫山の麓あ

たりも、後に住んだ市道の西の辺りも樹木の多いのがわかる。

市役所、郵便局、銀行、商工会議所などが、程よくまとまって、大体、町の中心近くにあつまり、中ほどをゆったりと蛇行しつつ狩野川の流れが貫き、すでに橋も四つ架かっているのが見えて、穏やかなしっとりとした風情のくらしが偲ばれる。

（理事 川口和子）



## 沼津市若山牧水記念館 開館10周年記念

# 春の西伊豆 “牧水歌碑めぐりの旅”

平成九年五月十七・十八日

西伊豆の若山牧水歌碑十基を巡るバスツアーに参加した。社団法人沼津牧水会が、沼津市若山牧水記念館開館十周年を祝つての企画で、二十八名の熱心なファンが集まった。サロン付きの伊豆下田バスに揺られて、修



善寺、天城峠を越え、下田須崎、恵比寿島の歌碑に到着。牧水が大正二年、灯台守をしていた旧友古賀安治を訪ね、下田沖の神子元島に渡つたことを記念して、地元、賀茂短歌会の原昇氏を中心に昭和五十五年に建てられた碑が岬の先端にある。刻まれている歌は「友が守る灯台はあはれわだなかの蟹めく岩に白く立ち居り」である。恵比寿島では映画のロケと鉢合わせして予定が狂つたものの、バスはバサラ峠を経て松崎町に。なまこ壁の長八美術館を見学して、次の牛原山町民の森まで大型車の入れない山道をタクシーに分乗して「石菫の歌碑」を見学に向かう。

牧水は大正九年二月、松崎から湯ヶ野温泉を経て天城峠を越え、雪に見舞われたものの無事湯ヶ島に到着している。この旅で詠まれた歌が昭和六十一年三月、牛原山の町民の森に建てられた。刻まれている歌は「幾年か見ざりし草の石菫の青み茂れり此処の溪間に」である。昼食はカサエストレリータ、モダンなガラス張りの洋食店、これぞ旅の醍醐味と

ばかり若者の遠足ムードに賑やかにいただく。一日目の後半は土肥の恋人岬と松原公園。

土肥町南部の小下田にある断崖状の岬が、グアムと姉妹提携して人気の恋人岬。若いカップル達に押され気味に遊歩道を岬まで十五分歩くと、愛のシンボル、ラブコールベルがある。「鐘を三回鳴らすと恋が実る」とあつてバスツアー参加者も、なぜか？みなさん鳴らしていた。ここからの駿河湾の眺望は絶景であり、途中にあつた牧水歌碑も霞んでしまう眺めであつた。大正七年一月、牧水は加藤東籬と土肥温泉を訪ねている。気に入った牧水は翌二月にも一人で訪れ「伊豆の春」九十一首を作つた。昭和五十九年十月、土肥町観光協会によつて富士見遊歩道に建てられた歌碑が「ひとみには露をたゝえつ笑む時の丹の頬のいろは桃の花にして」である。因みに、現土肥町観光協会会長は、このツアーの宿をお願ひした牧水荘土肥館館主野毛孝容氏（沼津牧



水会会員）である。土肥の松原公園は老松の美しいところで、大正十四年ここを訪れた島木赤彦が「土肥の海傍出でて見れば白雲を天にかけたり不二の高嶺は」と詠い、この歌碑がすでに建っていたが、赤彦の碑があつて牧水のないのでは、と昭和四十五年八月牧水長男旅人氏の設計により完成した。

「ひそまりてひさしく見ればとほ山のひなたの冬木かぜさわぐらし」

泊まりは土肥館。広間に牧水の秘蔵資料を公開してもらい、野毛社長からお話も聞けた。新緑の大野天風呂、夜の牧水を偲ぶ宴会、カラオケ大会と盛り上がった。景品提供をして



下さった土肥館、沼津の土井水産、マエダオム各社に感謝。土肥館の牧水歌碑は「わが泊り三日四日つゞきあつきたるこの部屋に見る冬草のや

ま」で二基もあり、一つ目は昭和三十七年六月、新しい玄関前の碑は昭和四十五年八月に除幕されている。並んで喜志子夫人の歌碑、蛙なき夕されくればかへらましかへらましといふ吾子つれてきぬ」が添うように建っている。

二日目は、昭和五十五年七月に、戸田写真館を営む菅沼清一氏によって御浜海岸の岬の突端近くに建てられた戸田港の歌碑「伊豆の国戸田の港ゆ船出すとはしなく見たれ富士の高嶺を」からスタートが切られた。バスは西伊豆バイパスを出て湯ヶ島へ、そして、西平神社の山桜の歌碑と天城酒店の庭先の小さな歌碑を見学する。大正十一年春、牧水は一連の「山ざくら」二十三首を作っているが、その一首、「うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花」が重さ八トンの八光石に刻まれている。神社入口の山道の中腹で少し判りにくい。ハリスが泊まった弘道寺、湯ヶ島小校庭の井上靖詩碑、しろばんばの碑と、湯ヶ島は天城会館の昼食まで伊豆の旅情にたつぷりとひたることができた。函南町畑毛温泉の「長湯して飽かぬこの湯のぬるき湯にひたりて安きころなりけり」は十一年前にできた。全員で碑前の草取り作業をして一泊二日の楽しい歌碑巡りの旅をしめくくった。ガイド嬢の一生懸命の案内とこのツ

アーのために作成された歌碑巡りの資料が好評でした。

（事務局 柴田昌明）



# 第44回 沼津牧水祭 短歌大会

十月五日  
午前十時



沼津市立図書館の四階視聴覚ホールにおいて牧水祭短歌大会が行われた。牧水記念館開館十周年の記念大会とあって、第三十一回・三十三回の講師をお願いした沼津在住の歌人の玉城徹先生を講師にお迎えして開催した。午前中は玉城先生に『若山牧水の人間像』と題して、牧水の人間臭い著名な相聞歌、或

いは写生歌ではない作品から牧水の人間像を語っていただいた。午後はお出立者の百二十首について批評をお願いし

た。時間がないこともあって、先生は簡潔に、的確にずばりと厳しい批評を展開。例えば「忘却が術となるならそれもしされど似たよな明日巡りくる」の似たよなについては「歌の調べにならない」とし、「明日巡りくる」は言わずもがなだと一蹴。「お茶の木にいくつも垂るる糞虫の内にこもれる孤独がゆるる」については、特に「内にこもれる孤独がゆるる」に「今風で、現在のはやり、洒落た言い方が、これは間違いである」と言い切られた。厳しいが納得される批評で参加者には概ね好評であった。

玉城徹先生選の上位三首、順に牧水賞第一席・二席・三席。

荷を負ひし物売人に熱き茶をもてなしたりし  
良き日を思ふ 田中 千代  
名優の後姿をたぐひなくよしと見にける映画  
の記憶 小野 徳司  
朝よりの鱗の小骨にこそばゆき喉いたはりて  
日は暮れむとす 池田きよ枝  
以下、玉城徹先生選の入選歌。  
窓近きえごのさ枝に山雀の来たらずなりて夏  
ふけにけり 坂部 マリ  
朝風の湾の海面にたえまなく波紋ひろごれり  
鯛の群れに 中村 美稲  
首かしげカップに付きし口紅を拭く乙女いて

茶房に和ごむ

富田 松枝

仙人の甥が山より背負ひ来しつるうめもどきの黄の実は匂ふ 関 みちえ

長尾峠下りつ湖を見放くれば先きをゆきたる夫も佇む 甲斐 能子

杖ひきて歩みあやふく行く友の畑打つ吾に労ひを言ふ 小松 和子

大樟の秀つ枝の伸びを窓に来てわが見上げた日にくるる頃 渡辺富美子

互選賞・一位 (市長賞)

色褪せし亡父の野良着はポケットで今だ匂えりきざみ煙草が 相原 明子

二位 (市議会議長賞)

屋根葺ける半裸の汗の若い衆よ、むこうは夕陽だ、おおい！すごいぞ 柴田 昌明

三位 (教育長賞)

三世代を住み慣らされてさりげなくことばのみこむ夕餉の席に 塩谷千鶴子

四位以下

車椅子を孫に押さるる師と会いて夕映えの道われも添いゆく 杉山富美恵

脳障害背負ふ子抱へ二十年不治の一言秘めて告げざり 望月 秀男

言い渡む言葉のごとくコーヒーに注ぐミルクが渦にめぐれり 芦川 源

(短歌大会実行委員長 須永秀生)



# 碑前祭・芝酒盛

十月十六日(日)午前十時  
沼津千本浜公園

今年、牧水記念館で定期練習を行っている「琴城会沼津」の大正琴のメロディーが式典前に会場内に流され、和やかな中での開会となった。東海庵青龍氏の献茶、林理事長の挨拶、斎藤衛沼津市長、五月女武教育長の祝辞に続く献花、献酒は予定していた若山旅人氏が御病気で、林理事長が代行した。

舞踊の花柳稔氏も出張不在のために、お弟子の稔吉野、稔紫苑のお二人が華やかに舞ってくださいました。今年で八回目を迎えた中学生



短歌コンクールも出詠歌千五百十首になり、表彰式では中学生の新鮮な発想や発見に拍手が送られた。「牧水のうた」四曲を沼津合唱団が尾鷲謙氏の指揮により歌い上げ、総勢八百五十名の参加者の気持ちは一段と華やき、芝酒盛の鏡割り、山本一喜市議会議長の音頭による乾杯へと続いていた。おでん、焼ソバ、焼鳥を着に、樽酒、牧水」が振舞われ、芝生の上での宴会も大盛況であった。遠来の

参加者の中には、牧水が早大在学中の帰省時に、岡山県の二本松峠で詠んだ代表歌「幾山河」の地、哲西町から村上昇教育長、羽場牧水顕彰会会長代行、総務課の加藤、羽場氏



の四氏や、東京牧水会の和田会長、田原事務局長の顔も見えた。毎年参加の岳心流沼津愛吟国風会の吟詠の中で宴は栄えた。協賛のブルーシーのジュース、東海庵の抹茶、珈琲館のコーヒー、牧路のシユウマイも順調に捌けていた。先年来すっかり人気者になった裾野五竜太鼓の男竜、女竜の合奏による勇壮な響きと躍動する打ち手の動作に参加者は魅了された。牧水の御遺族の姿がないことが少し淋しい気もしたが、今年も楽しい牧水祭の日であった。

(碑前祭実行委員長 金子安夫)

# 第10回 雛の歌会

平成十年三月一日(日)午後一時半  
沼津市若山牧水記念館会議室

講師 青井 史 氏



第十回の雛の歌会が三月一日、若山牧水記念館において、「狩人」の青井史先生を迎えて行われた。出席を原則として、商品も賞状もない雛の歌会は、女性の歌人に接する機会として定着して来ているようである。当日はいささか天候の悪い状況にもかかわらず、およそ六十名の参加を得て、盛会に行われた。青

井史先生は、ソフトな口調で、丁寧に作品を讀まれ、的確な批評を加えて参会者を十分に満足させてくださった。

先生の批評の骨子は大きく二つに要約されるように思った。一つは、個性を出すことを心掛けること。その例として「湯のたぎる音のみ響く静寂をいとおしみつつ読書にふける」の作品の「読書」の部分は何の本を讀んだかを具体的に言うことで個性が出るなど、納得の評であった。もう一点は、内的なものに降りて行くようなという表現で、生活の断面へどう切り込むかを示唆してくださったように思った。

億年のなかの一刻寒夜明け老樹鎮もる神苑にたつ  
川口 和子

の作品に対して一応の評価をした上で、しかし、自分にとって、この「老樹鎮もる神苑にたつ」がどういふことなのかを捉えることが大切と語られるなど、作歌の衝動・動機に至る讀みが、生活はあるが詩文学がないと指摘されて来た私達の作品にとって、大きな方向性を与えられたとも思えた。

最後に、青井史先生の選ばれた作品と評価をした作品を紹介して報告に代える。

青井先生五首選  
年の瀬の沼津の里は風荒らしいたくな吹

きそ吾背帰るさ 鈴木 彦也

筆まめなあなたに書かぬ返書などどよもして闇の底に漂う 須永 秀生

水ぬるむ川の流れを引入れて明日植える田の代掻きをする 佐藤 公男

きしきしと雪を泣かせて通夜の道何を急ぐや友は逝きたり 増田 邦夫

征く君の熱き息吹きをそと避けし十九の悔いよ雛の髪梳く 勝呂 秩子

代掻きの歌を除く四首にどこかに相聞の匂いがすると青井先生はご自分の選歌を振り返って笑っておられたが、相聞の気配は確かに作品に艶を持たせるようにも思った。

次の作品は問題を指摘しながら好評を与えられた作品。

凧持ちて子等かけ登る風の丘高く澄みたる空に向ひて 杉山 治子

冬の峰紅茶のカップにとまらせて吾も溺る隙見せ居むか 伊藤 あい

点ほどに丸めし線をeと読むアメリカからの手紙戴く 新井 静穂

寒に焚く黄落の唄うつうつと青き煙は炎の音をつれ 柴田 昌明

答案の単語の上に種子ひとつ吹かれてきたり全きその実 中川 禮子

(理事 須永秀生)

# 文化講座

第3回

## 「素晴らしい故郷 沼津を語り・歌う会」

平成9年7月20日(日) 午後6時～8時



話す昔の狩野川や河口周辺、千本海水浴場、きれいだっただ砂浜の様子をなつかしく聞いた。ゲストの女性お二人には、昭和初年頃の沼津街中にタイム・スリップしていただき、過ぎて行った少女時代に想いを寄せてもらった。この集まりは毎年、わが古里について語り残すというこの大切さを教えてくれる。そして、らとりは悲しからずや空の青……の牧水歌や文部唱歌を参加者で歌い、話し好き、歌うこと大好き人たちで、牧水記念館ラウンジは初夏の夜遅くまで賑わっていた。

今年度は、沼津市千本常盤町老人会長、吉田如一氏をお招きして三回目の「素晴らしい故郷沼津を語り、歌う会」を開催した。  
お話し相手として俳人中村やよい氏、歌人川口和子氏にも加わっていただき、古き良き時代の思い出を楽しんだ。  
お年寄りから子供づれのお母さん方まで五十名の参加者は、海の記念日ともあつて、吉田さんの

## 「牧水記念館短歌会」

日 時：平成9年4月～平成10年3月  
毎月第2土曜日 午後1時30分～  
会 場：記念館会議室  
参 加 者：延べ189人



(社)沼津牧水会が主催する短歌の勉強会は、理事の須永秀生氏が講師となり、平成七年六月から始まりました。それ以来続けられているこの勉強会に集う二十二名が、昨年十二月に合同歌集「せんぼん」を出版しました。  
毎月第二土曜日に開かれる勉強会は、牧水の短歌から現代歌人の作品までの、また万葉集から新古今和歌集に至る広範囲にわたる内容で、すべて須永氏の手づくりの資料によるユニークな学習です。  
また、毎回の勉強会の後半は、参加者各自が持参した短歌二首を先生が丁寧に批評され、作品の提出を通して親睦が図られ、大好評のうちに四年目に入ります。  
記念館近くの自然の中を吟行してみたいという声に参加者から聞かれ、年末には二冊目の合同歌集を作成するという目標も立てられています。



沼津市若山牧水記念館 開館10周年記念

## 牧水旧居 通称「市道の家」ミニチュアで復元



沼津市若山牧水記念館は、平成九年十一月一日に開館十周年を迎えました。これを記念して、かねてからの念願であった牧水旧居のミニチュアハウスが日本ドールハウス協会主宰の石川學氏によって制作されました。石川氏は趣味で

ドールハウスを作られていますが、今回初めて建築模型を手がけてくださいました。素人の目からみれば、ドールハウスも建築模型も同じようにみえますが、専門の立場からは違いは大きく、また、資料が少なく資料収集のための時間的余裕がないなど悪条件も重なり、かなり苦労されたようです。

このミニチュアハウスは、数少ない当時の写真や制作途中で見つかった「青焼きの図面」、NHKテレビの「めぐり」に登場した大正時代の建物などを参考にして作られたそうです。模型といっても、屋根や柱はもちろんのこと、障子や襖にいたるまで大変精巧にできています。牧水の長男としてこの家に住み、自らも一級建築士である若山旅人前館長は、この作品を見て開口一番、「懐かしい」と子供のようなまなざしで喜んでくださいました。牧水が大正九年に沼津に越してきて七十年余、牧水が毎日眺めたという富士山は、今も変わりなくその雄姿を見せています。そして牧水自身がこの家にかけて熱い思いを再現し



てみたいという思いが、今ここに形となりました。このミニチュアハウスを通して、沼津に住む皆様にはもちろんのこと、全国の皆様に、牧水が愛した千本の風を感じていただけたらと願っております。

(事務局 市川真理)

Mountain after Mountain, River after River,  
I'm wandering days and nights,  
Seeking a region of no solitude

TO SHIHISA YAGI

オーストラリア在住  
十八年、日本を出た時  
には全く思いもしなか  
った方向に人生が進み、  
毎年二回、世界一周の  
デザイン研究のための  
出張をする機会も与え  
られて、オーストラリ  
アのみならず世界全体  
から、現生活、吾が人  
生、故郷などを顧みる  
ことができるようになって  
いった。しかし、十八年  
という年月の流れの中  
で、「ふるさととは遠きに  
ありて想うもの」だけ  
ではなく、現実の  
生活の中で静かに着実  
に自分の内部で希薄な  
ものに昇華されている  
のである。

オーストラリア在住  
十八年、日本を出た時  
には全く思いもしなか  
った方向に人生が進み、  
毎年二回、世界一周の  
デザイン研究のための  
出張をする機会も与え  
られて、オーストラリ  
アのみならず世界全体  
から、現生活、吾が人  
生、故郷などを顧みる  
ことができるようになって  
いった。しかし、十八年  
という年月の流れの中  
で、「ふるさととは遠きに  
ありて想うもの」だけ  
ではなく、現実の  
生活の中で静かに着実  
に自分の内部で希薄な  
ものに昇華されている  
のである。

程度に俗に言う「郷愁」しか感じていない。  
例えば、狩野川べりでのハゼ釣り、防潮堤な  
どなかった以前の千本浜、草樹が鬱蒼と繁り  
踏み入るのが怖かった首塚周辺、そして旧湯  
山邸跡地の野原など。そして、余り意味も解  
らなかつた短歌の刻まれた大きな丸石。この  
大きな石によじ登り、牧水の「幾山河こえさ  
りゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆ  
く」に導かれる、のちの生き方の起点に遊ん  
だのであった。

十九歳でヨーロッパを放浪した。そして昔  
で言えば人生五十年のその年齢も近づいて来  
る今、おもえば若山牧水という歌人の「幾山  
河……」を実際の人生の中でやっているのは  
自分ではないかと感ずるのだ。

五年ごとに、オーストラリアの友人達に彼  
らの友情に対し感謝の手創りカードを送って  
きた。そして、十五年目のカードに、牧水の  
「幾山河こえさりゆかば寂しさの……」の英  
訳をつかい、メルボルンがふるりの沼津と同  
じように「寂しさのはてなむ国」になつてき  
たように感ずると書いた。日本を訪れたこと  
もない友人たちは、この友情ありがとうのカ  
ードに大喜びをしてくれた。

寂しさの果てなむ国、又は人生を探し求め  
旅をし続けてきた自分をあらためて見つめ直



すとき、もうひとつ牧水の歌で体にしみわた  
つてくる短歌がある。  
「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしずか  
に飲むべかりけり」  
この歌になにかしみじみと共感を感じとれ  
るようになったのは、最近のようである。よ  
く、便りの終わりに「日本は春へ、オースト  
ラリアは秋へ、このさして大きくもない世界  
なのに全く逆の季節の二つの国、とても素敵  
ですね」と書く。沼津もメルボルンも同じく  
らいに好きなどころだ。風の流れ、陽の光、  
雨の音……自然の中では小さな存在である人  
間がどのように感じ生きるのかは、その人如  
何であり、場所の違い、国の違いはあまりな  
いと思っている。

いつの日、又沼津に帰つたなら、あの大き  
な丸石によじ登ってみよう！ 亡くなった母  
は、きつと笑って言うだろう。  
「いくつになつても子供みたい」と。



千本松原MOROコンサート



森の組曲コンサート



『夢鳴群コンサート』周 越紅(ソプラノ)



夢鳴群コンサート



ギタリスト3コンサート

(撮影 草野俊文)



中村浩作品発表会

# サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジにて



京谷弘司クアルテートタンゴ

(撮影 伊藤千里)

第1回 『京谷弘司クアルテートタンゴ』  
 日時：平成9年8月3日(土) 午後6時  
 出演：京谷弘司(バンドネオン) 淡路七穂子(ピアノ)  
 田中伸司(ベース) 古橋 幸(ヴァイオリン)  
 来場者：100人

第2回 『千本松原MOROコンサート』  
 日時：平成9年9月21日(土) 午後6時30分  
 出演：諸星 肇(ギター) 大久保敏之(ピアノ)  
 来場者：100人

第3回 『森の組曲コンサート』  
 日時：平成9年9月28日(日) 午後6時  
 出演：小馬崎達也(ギター) フェビアン・レザ・パネ(ピアノ)  
 来場者：60人

第4回 『夢鳴群コンサート』  
 日時：平成9年10月11日(土) 午後6時30分  
 出演：夢鳴群 周 越紅(ソプラノ)  
 来場者：100人

第5回 『ギタリスト3コンサート』  
 日時：平成9年11月15日(土) 午後6時  
 出演：渡辺香津美 福田進一 鈴木大介  
 来場者：150人

第6回 『中村浩作品発表会』  
 日時：平成9年12月7日(日) 午後6時30分  
 出演：梅原 晃(ピアノ) Chor音美人(コーラス)  
 (コールオンビート)  
 来場者：150人

# 平成 9 年度事業報告

総会 (第11回)	平成 9 年 5 月 2 日(金)午後 6 時～7 時	
理事会 第 1 回 (通算59回)	9 年 4 月12日(土)午後 6 時～8 時	館報発行
第 2 回 ( // 60回)	9 年 6 月10日(火)午後 6 時～7 時15分	第19号 9 年10月 1 日
第 3 回 ( // 61回)	9 年 9 月 2 日(火)午後 6 時～8 時30分	第20号 10年 3 月15日
第 4 回 ( // 62回)	9 年 12 月16日(火)午後 6 時30分～7 時	会報発行
第 5 回 ( // 63回)	10年 3 月27日(金)午後 6 時30分～8 時	第10号 9 年 5 月15日

## 1 調査研究事業

### (1) 春の西伊豆牧水歌碑めぐりの旅

日 時：平成 9 年 5 月17日(土)～5 月18日(日)

場 所：静岡県土肥温泉

参加者：会員23名 非会員 5 名

## 2 第44回沼津牧水祭の運営

### (1) 短歌大会

日 時：平成 9 年10月 5 日(日) 午前10時～午後 4 時

会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール

講 師：玉城徹氏

応募短歌：237首

参加者：150人

### (2) 碑前祭・芝酒盛

日 時：平成 9 年10月19日(日) 午前11時～午後 3 時

会 場：千本浜公園 牧水歌碑前

参加者：約850人

## 3 文学講演講座の開催等

### (1) 講 演

「素晴らしい故郷 沼津を語り・歌う会」

日 時：平成 9 年 7 月20日(日) 午後 6 時～午後 8 時

会 場：記念館ラウンジ

講 師：吉田如一氏

// : 中村やよい氏

// : 川口和子氏

参加者：50人

### (2) 開館10周年記念「牧水の愛した沼津」

日 時：平成 9 年11月 1 日(土) 午後 1 時～午後 4 時

会 場：千本プラザ音楽ホール

参加者：253人

### (3) 短歌会「雑の歌会」

日 時：平成10年 3 月 1 日(日) 午後 1 時30分～午後 4 時

会 場：記念館会議室

講 師：青井史氏

応募短歌：93首

参加者：59人

### (4) 牧水記念館短歌会

日 時：平成 9 年 4 月～平成10年 3 月 第 2 土曜日

会 場：記念館会議室

講 師：須永秀生氏

参加者：延べ189人

### (5) 第 8 回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

募集期間：平成 9 年 5 月 1 日(木)～7 月 1 日(火)

応募短歌：1,510首 (12校 1,510人)

入選短歌：30首 (30人)

表 彰：平成 9 年10月19日(日)

沼津牧水祭碑前祭にて

## 4 音楽イベント 「サロン音楽の夕べ」 牧水記念館ラウンジ

## 社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹  
 〈副理事長〉 杉山 光男 河本與司幸  
 〈理事〉 佐藤英之助 浅井 治  
 川口 和子 青木 朝子 須永 輝夫 田中 和男  
 四方 一瀬 八十濱俊一 杉山 秀生 金子 安夫  
 重義 鈴木 弘行 芳春

## 編集後記

一年に一度、この「幾山河」の会報を編集する頃になると、館の前庭にあるゆずりはの新芽が金みどり色に萌え猛ける。近所の満開の八重桜は、はなびらを事務室の窓に舞い届けてきたりする。風の穏やかな快晴の日、駿河の青海を白い船が布を裁つように走るのを眺めていると、生きていることが、ふうと意識から消えていく瞬間があつたりもして、不思議な刻である。

七年前より大悟法利雄初代館長を継ぎ当沼津市若山牧水記念館二代目館長を務めていた若山旅人先生は、去る三月十四日、午前三時三十八分、満八十五歳のお誕生日を目前にして、国立相模原病院にて肺炎のため亡くなられた。

旅人先生は、大正二年牧水の長男としてご母堂喜志子さんの実家長野県塩尻市に生まれ、東京に住んだが、大正九年沼津市に移住した。楊原小学校、静岡県立沼津中学校に学び、横浜高等工業学校、現横浜国立大学工学部建築家を卒業後、直ちに住友本社に入社し、戦艦大和や航空隊格納庫等の設計を手懸けた。

戦後、保土谷化学研究所の設計により、建設大臣賞を受賞し、また、父牧水の生地宮崎県東郷町坪谷の牧水記念館の設計にあたるなど一級建築士として活躍した。

昭和四十三年ご母堂喜志子さんの逝去に伴い創作社を継承し、歌の道に進み歌人としても一家をなした。

父牧水と同じ想いの中、沼津を愛し良き「語り部」であり、父と共に歩かれた後半生であった。時を前後して一月二十一日には沼津生まれの牧水の次男、富士人さんが亡くなられた。ここに深い哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。（事務局長 柴田 昌明）